

**Pre-News Letter** 創刊号

# *Sato Project*

*Sato Project*

～社会的・生態的そして地球環境問題としての遺伝資源の喪失～  
「里」プロジェクト

**「シルクロードの『無常』」** 佐藤洋一郎(地球研)



(小河墓遺跡：佐藤洋一郎撮影)

シルクロードの昔を追い求めて、タクラマカン砂漠の小河墓<sup>しょうがぼ</sup>遺跡を訪ねた。新疆ウイグル自治区のウルムチから夜行列車で前線基地コルラへと向かう。早朝コルラで砂漠専用車をチャーターして道なき道をゆく。夕暮れ迫る遺跡にたどり着くころには全身くたくたになった。しかし、暮れなずむ砂漠の中に無数の墓標が立ち並ぶ遺跡のさまは壮観だった。その迫力に疲れが吹き飛ぶ思いがした。

遺跡は、1934年、スウェーデンの探検家S・ヘディンらにより偶然発見されたものだ。ヘディンの旅行記『さまよえる湖』によると、彼らはカヌーで旅をしている。「小河墓」の名も、遺跡が小川のほとりにあったことにちなむ。ということは70年前、ここには水があったのだ。遺跡はその後流砂に埋もれ、2002年の再発見まで消息不明となった。その後、砂の中にねむる多数の棺からよく保存されたミイラが幾体もみつかった。中には白人っぽい顔立ちの女性たちもいた。3000年以上も前に亡くなった彼女たちの枕もとには、小麦がぎっしりとつまった小さな編みかごがおかれていた。

多量の小麦の種は農耕の存在を物語る。砂漠に麦畑があったのか。種子は保存状態がよく、そのDNAを調べれば、それが、パンか、パスタか、それとももっと原始的なものにしたものだったかがわかるに相違ない。麦の種類がわかれば、当時の農業がどれくらい水や肥料を使っていたかもおよそわかる。それに、無数の墓標が木でできていることは森があったことを暗示する。これはまだ私の仮説だが、タクラマカン砂漠の一带は1500年前くらいまでは、今よりずっと緑豊かな土地で、シルクロードは、緑に覆われた大地を東西に通る、豊穡の街道ではなかったか。玄奘三蔵の旅も、本当は、豊かで楽しい旅だったのかも知れないと、私は勝手に想像している。

シルクロード帯は今、荒涼たる砂漠が広がっていて、むかし沿道に多くの人びとがすみ、東西の産物が頻繁に行きかう街道であったとはにわかには信じがたい。だがこの地は太古の時代から砂漠だったのではない。ヘディンたちがカヌーで訪れた川あとは水もなく、無数の貝殻が散らばる砂海の一部と化していた。それらの貝殻は、この土地の砂漠化が70年というわずかな時間の間にも進行したことを無言のうちに物語っている。シルクロードは、その姿の変容をもって「無常」という仏教の思想を今の世の私たちに伝えているのかもしれない。そして、無常であるならシルクロードを昔の豊穡の街道に戻すこともできるだろう。(京都新聞7月6日夕刊「現代のことば」要約)

**ご意見、ご感想をお寄せください。**

総合地球環境学研究所17年 7月11日(月) 発信

お問い合わせ 佐藤研究室 (大島)

[mihosma@chikyu.ac.jp](mailto:mihosma@chikyu.ac.jp)

〒602-0878 上京区丸太町通河原町西入高島町 335

Tel:075-229-6209・6208 Fax:075-229-6200